

目黒区納税貯蓄組合連合会会長賞

税の役割と未来への責任

日本工業大学駒場中学校 三年

縫部 勇太

今年の夏休み中に、家族と一緒に伊豆山を訪れる機会があった。そこは四年前、土石流により大きな被害を受けた場所として記憶していた。実際に現地を訪れるまでは、ニュースで見た被災地というぼんやりとした印象しかなかった。しかし現地で目にしたのは、私の税金に対する考え方を根本から変える体験となった。

現地を訪れると復旧工事や防災対策工事が各所で行われている様子を目にした。新しく整備された道路や砂防堰堤、異常気象に備えた排水設備など、大規模な工事の痕跡があちこちに見られた。その時、ふと疑問に思った。これほど大規模な工事は、どこの誰がお金を出しているのだろうか。調べてみると、これらの復旧・防災事業は全て税金で賄われていることを知った。国の災害復旧事業、県や市の取り組み、どれも私達が納めている税金が原資となっている。一つの砂防堰堤を作るだけでも数億円、道路の復旧には数十億円という、個人や企業では到底負担できない規模の事業だった。さらに驚いたのは、被災していない地域の人々の税金も、この復旧作業に使われているということだった。普段私達が買い物で払っている消費税、両親が給料から引かれている所

得税、それらがこうした災害対策に使われている。つまり税金は全国の人々が困っている地域を支える、「助け合いの仕組み」であつたのだ。今まで税金は「取られるもの」だと思っていたが、実際は「みんなで社会を守る物」だということを実感した。普段は見えないけれど、困った時に力を発揮する社会の仕組みがあることを知り、一人ひとりの小さな負担が大きな力となって現れることに感動した。

伊豆山での体験を通じて、これからの時代に必要な税の使い方についても考えるようになった。異常気象が頻発する現代では防災インフラの整備はますます重要になる。また、高齢化が進む中で社会保障制度を整えることや次世代の教育環境を育てる事も大切だ。地球環境を守るための施策への投資も欠かせない。

あと数年もすれば、私も働いて税金を納める立場になる。その時は、今度は自分が社会を支える番だ。今回の体験で税金を納める事は決して負担ではなく、社会への貢献だと理解できた。責任を持つて税金を納め、その使い方にも関心を持ちたい。今の私にできる事は、税金の使われ方に対して常に関心を持ち続け、防災意識を高め、社会の資源を大切にする等のことだ。そして、将来責任ある社会人になるために社会問題への理解を深め、困っている人達と助ける気持ちを忘れないようにしたい。

伊豆山での体験は私の税金への見方を根本から変えた。災害の復旧現場を通じて税制度の本当の意味を理解できた。今回得た気づきを忘れず将来は支える側として貢献したい。